

今夏は、地球温暖化によると思われる異常気象や環境の変化、時期はずれの大雨、台風、さらには中越沖地震などの自然災害が次々と発生している。一方、食生活においても、農薬づけ、禁止されている抗生剤の投与、不当表示の食材等が次から次へと摘発されている。

今日、さまざまな不安が周囲をとりまき、何となくイライラしている。今後もますますこの世の中が悪化するのではと、悲観的になってしまう。

せめて生命を預ける医療は安心して任せてよいかといえば、連日のように医療事故だ、ミスだとマスコミが流すと、また不安になってしまうし、高齢になっても年金が保証されるか否か、さらに不安にさせる報道が続く。まさしく今の世の中、不安だらけである。かくして、ますます情緒不安定で悲観的な状況に陥ってしまう。

扉で清水先生が述べられているように、前頭前野の未発達が衝動的行動の大きな原因とのことであるが、近年は周囲の不安感やイライラ感が持続しているせいか、20歳を過ぎても前頭前野の発達が阻害され、忍耐力や判断力が育成されず、とんでもない事件を起こす人がふえつつある。

イライラ感は医師も同じように感じている。外科医全般のなり手が少しずつ減少し、十数年後には外科医志望者がゼロになると危惧されている。むろん、この外科医の中には脳神経外科医も含まれている。医療評論家によると、以前は外科医は収入が少なくても、積極的な治療を通して患者の生命を救うという使命感やプライドをもって治療にあたっていたが、今やその使命感、プライドが失われて、他の肉体的・精神的に楽な診療科に移ってしまう可能性がある指摘されている。医療訴訟は年々ふえ、いったん訴訟に巻き込まれるとたくさんの資料の作成や出廷の煩わしさで、たとえ過失なしとなっても多くの時間が失われ、当事者は疲弊してしまう。外科医の激務は以前と比べて変わらないが、収入も多くなり、社会・マスコミの批判は強く、時には患者の暴言・暴力を受けることもあれば、医療訴訟の当事者となる可能性も年々高くなっている。このような状況で、果たしてこれまでのようにプライドをもって医師としてやっていけるのか。

ノーブレス・オブリージュが期待できない以上、欧米と同じく、外科医や産科医などリスクの高い科に就く医師の報酬の引き上げは、外科医離れのひとつの歯止めになるかもしれない。

さて今月号では、清水先生の扉の他、総説、研究、症例報告等、興味のある論文が掲載されている。しかしながら、仕方のないこととはいえ、研究論文が少ない。今後は是非多くの研究論文の投稿を期待するものである。